

『武徳編年集成』記事にみる天正十七・八年の 豊臣・徳川・北条間交渉の真偽について

片 山 正 彦

はじめに

本稿は、『武徳編年集成』の真偽・信頼性を再検討するものである。

『角川日本史辞典』^①によれば『武徳編年集成』は、木村高敦編、九十三巻、元文五年（一七四〇）の大宰春台の序があり、天文十一年（一五四二）から元和元年（一六一六）までの家康の伝記であるという。

『武徳編年集成』の信ぴょう性を検討したものについて、小和田哲男氏「『武徳編年集成』の史的考察」があり、ここにおいて氏は詳細な分析を行っている。^②

氏によれば『武徳編年集成』の完成は、寛保元年（一七四一）、あるいはその前年ぐらいになるという。

そして『武徳編年集成』の著者木村高敦が、編纂の時点においてできる限りの古文書・家譜・記録を博搜し、高敦の私見をまじえながら記述した、この時代における研究書ともいえるべき性格のものであるという。また氏によれば、高敦は『武徳編年集成』において、従来の説にとらわれず自説を述べており、それをできた背景には自ら調べ上げた豊富な史料が後ろ楯となつてゐるが、ただ著者高敦が出典を明記しなかつたことが悔やまれるところであるという。

ただこのような研究はあるものの、『武徳編年集成』が江戸期の編纂史料であるということから、一般的にはその史料価値・信頼性は低いとされる。それゆえに歴史学において、ある事実を確認するのに『武徳編年集成』を利用する際には、その裏付けをとるなど、注意を払わねばならないとされる。

小和田氏の考察以来、『武徳編年集成』の信ぴょう性について採り上げた論稿は、ほとんど見当たらない。しかしながら、近年では自治体史の編纂が進み、あるいは新史料の発見により、小和田氏が右の考察を行つたところに比して、『武徳編年集成』に記述される内容を改めて跡付けることが可能になっていいると考える。

この点で、小和田氏が述べるように、著者高敦が出典を明記しなかったとする部分についても、現在になつて裏付けられる箇所があると思われる。

特に本稿で採り上げる天正十七年（一五八九）は、豊臣政権の小田原北条攻めの前年に当たり、『武徳編年集成』には、これに関する記述が非常に多くみられる。本稿では、筆者の問題関心から天正十七・八年の

豊臣・徳川・北条間交渉を素材として、『武徳編年集成』の信ぴょう性を書状や日記などの同時代史料によつて裏付けていきたい。

なお『武徳編年集成』は、小和田氏によれば写本・版本あわせて約七十もの諸本が流布しており、その他にも個人の所蔵になるものを網羅すればかなりの数になるといふ。本稿では、このような事情を鑑み、現在最も一般的に通用していると思われ、小和田氏も関わつた、一九七六年、名著出版より刊行された『武徳編年集成』（天明六年版（木活字本）全九十三巻を縮刷複製したもの）を用いる。

一、〔事例1〕『武徳編年集成』天正十七年七月条

○廿一日黎明ヨリ甚雨ユエ井伊直政ガ許ニ渡御ノ延引セラル是ヨリ向ニ北条氏直ヨリ板部岡越中融成入道江雪大坂ニ赴キ 神君ト北条家封糧ノ事ヲ演説ス秀吉命ジテ曰真田安房守昌幸ガ上州ノ内所領三分二并ニ沼田城共ニ北条へ遣ハシ其代地ハ

徳川家ヨリ真田ニ授ラルベシ同所三分一奈久留美ノ城トモニ真田□考ノ廟所アルユエ昌幸相違ナク領知スベキ旨ニテ則江雪帰国シケレバ今二十一日秀吉ヨリ富田左近將監知信津田隼人正ヲ以テ又東国ニ赴シム（略）○廿八日秀吉ノ兩使駿府ニ到リ旨趣悉ク 神君ヘ演達シ榊原式部大輔ト共ニ駿府ノ真田ガ宅ニ往テ是ヲ伝フ昌幸承諾セシカバ是ヨリ相州ニ至テ氏政氏直ヘモ是ヲ達ス氏直モ亦秀吉ノ命ニ応ジ兩使ニ板部岡江雪斎ヲ副テ沼田城ニ遣ハスベキ旨胥議ス

〔事例1〕は、天正十七年七月、秀吉の命により真田昌幸の所領上野沼田を北条に与えるという所領分割問題に関する叙述である。右記によれば、二十一日、まず北条氏直の使者「板部岡越中融成入道江雪」が秀吉の許「大坂」へ赴き、「神君（家康）」と「北条家」の「封糧」のことを「演説」する。対して秀吉は、上野の真田昌幸の所領のうち三分二と沼田城を北条に与え、その代わりに徳川より真田へ「同所三分一」と

「奈久留美ノ城（名胡桃城）」を真田の「廟所」ゆえ昌幸に安堵する旨を命じる。これをうけ江雪は直ちに帰国し、秀吉よりの使者である「富田左近將監知信」と「津田隼人正」が東国へ赴いたという。

これに関して『家忠日記』天正十七年七月二十一日条には、

（略）榊原式部大輔（康政）、信州真田へ沼田の城さかミ（北条氏直）へ渡しニ被越候、京都よりハ富田平右衛門（信知）、津田四郎左衛門尉（隼人正）けんしに被越候、沼田城うけ取候ハ、氏直（氏直カ）上へ出仕可被成候、

とある。『家忠日記』は、家康に仕えた松平家忠の記した日記である。これによれば、二十一日には秀吉よりの使者である両「けんし（検使）」の富田・津田は沼田に到着しており、そして両検使は、北条が沼田を受け取る条件として氏直の上洛・出仕を挙げていることがわかる。

ここでの問題点は、『家忠日記』という同時代史料では二十一日に富田・津田が沼田に到着していること

になっており、これ以前に北条側の使者である江雪の上坂があるはずである。だが『武徳編年集成』ではそれは二十一日のことになっており、錯綜がみられる。

また具体的な交渉内容である所領の分割問題であるが、『武徳編年集成』ではこの交渉は順調に進んだように読み取れる。

「北条氏直書状」⁽⁴⁾

沼田可渡由有之而、自京都富田(知信)・津田

(信勝)沼田へ可為参着由候、依之安房守(北条

氏邦)半途へ打出、為陣取、自是為請取手、左衛

門佐(北条氏忠)指遣候、一、(略) 一、(略)

追而日限者、来廿五、六之儀ニ可有之候、以上、

(天正十七年)

七月廿日

氏直(花押)

安中左近大夫殿

しかしながら右記氏直書状によれば、沼田の「請取手」たる「左衛門佐(北条氏忠)」だけでなく、「安房守(北条氏邦)」が「半途へ打出」し「陣取」つてい

た。すなわち北条側は臨戦態勢だったのであり、所領の分割交渉が順調ではなかったことが窺える。

次に、「真田安房守昌幸ガ上州ノ内所領三分二并二沼田城共ニ北条へ遣ハシ其代地ハ 徳川家ヨリ真田ニ授ラルベシ同所三分一奈久留美ノ城トモニ真田□考ノ廟所アルユエ昌幸相違ナク領知スベキ」という秀吉の命であるが、天正十七年七月時点で、「三分二并二沼田城」「同所三分一奈久留美ノ城」という具体的なやりとりを示す同時代史料は確認できない。確認できるのは右記氏直書状にみえる「沼田可渡」や、『家忠日記』にみえる「沼田城うけ取候ハ」のみである。これについて、以下の史料を挙げる。

「豊臣秀吉より北条氏直に遣れる宣戦布告状」⁽⁵⁾

條々

一、北條事、近年蔑公儀、不能上洛、殊於関東、任我意、狼藉條、不及是非、然間去年可被加御誅罰処、駿河大納言家康卿依為縁者、種々懇望候間、以條数被仰出候へば、御請申付而被成御赦免、則美濃守(北条氏規)罷上、御礼申上候事

一、先年家康被相定條數、家康表裏之様ニ申上候間、美濃守被成御対面上ハ、境目等之儀被聞召届、

有様ニ可被仰付之間、家之郎從差越候へと被仰出候処ニ、江雪（板部岡）差上訖、家康与北條（氏直）国切之約諾儀、如何と御尋候処ニ、其意趣者、甲斐信濃之中、城々ハ家康手柄次第、可被申付、上野之中ハ北條可被申付之由相定、

甲信両国ハ則家康ニ申付候、上野沼田儀者北條不及自力、却而家康相違之様ニ申成、寄事於左右、北條出仕迷惑之旨申上候歟と被思食、於其儀者、沼田可被下候、乍去上野のうち真田（昌幸）持来候知行三分二、沼田城ニ相付、北條ニ可被下候、三分一ハ真田ニ被仰付候條、其中ニ

有之城を真田ニ可相拘之由、被仰定、右之北條ニ被下候三分二之替地者家康より真田ニ可相渡旨、被成御究、北條可出仕との一札出候者、則

被差遣御上使、沼田可相渡と、被仰出、江雪被返下候事

一、当年極月上旬、氏政（北条）可致出仕旨、御請

一札進上候、因茲被差遣津田隼人正・富田左近將監、沼田被渡下候事

一、沼田要害請取候上ハ、右之一札ニ相任則可罷上と被思食候処、真田相拘なくるみ（名胡桃）の城を取、表裏仕候上者使者（石巻康敬）ニ非可被成御対面儀候、彼使雖可及生害、助命返遣候事

一、（略）然処ニ氏直背天道之正理、对帝都企奸謀、何不蒙天罰哉、古諺云、巧詐不如拙誠、所詮普天下逆勅命輩、早不可加誅伐、来歳必携節旗令進発、可勿氏直首事、不可廻踵者也、

天正十七年十一月廿四日 朱印（秀吉）

北條左京大夫（氏直）とのへ

右記秀吉朱印状は、一般的には秀吉が北条氏直に宣戦を布告したとされるものである。右記布告状二条目には「江雪（板部岡）差上」^⑥江雪が上洛したことと、「上野のうち真田（昌幸）持来候知行三分二、沼田城ニ相付、北條ニ可被下候、三分一ハ真田ニ被仰付候條、

其中ニ有之城を真田ニ可相拘之由、被仰定、右之北條

ニ被下候三分二之替地者家康より真田ニ可相渡旨、被

成御究、北條可出仕との一札出候者、則被差遣御上使、

沼田可相渡と、被仰出、江雪被返下候事」とあり、具

体的な所領分割が記される。特に『武徳編年集成』に

みえる「真田安房守昌幸ガ上州ノ内所領三分二并二沼

田城共ニ北条へ遣ハシ其代地ハ 徳川家ヨリ真田ニ授

ラルベシ」は、右記布告状の叙述とよく似通っている。

また布告状にみえる「知行三分二、沼田城ニ相付」

の文言から、知行三分二に沼田城を付けたことがわか

り、「沼田可渡」のみの記述しか無い氏直書状や、「沼

田城うけ取候ハ」としか無い『家忠日記』の記述よ

りも具体的な事実が明らかとなる。

ただし右記布告状の史料性格として、記される内

容が豊臣政権側の主張である点、そして採り上げた箇

所については七月二十日ごろの出来事を「十一月廿四

日」に記している点には注意せねばならないであろう。

したがって「事例1」所領の分割問題は、事実関係

はともかく、書誌学的にみれば右記布告状を参考に記

述された可能性が高いといえる。

二、「事例2」『武徳編年集成』天正十七年十二月条

○十日 神君秀吉ト御対顔秀吉北條ガ表裏アルヲ

深ク憎デ来春征伐スベキ旨相議セラル 神君急ギ

酒井右兵衛大夫忠世後雅楽頭ト改内藤弥三郎正成

後修理亮ト改青山藤七郎忠成後常陸介ト改等ノ 台徳

公（秀忠）輔佐ノ族へ尊翰ヲ賜ハリ彼上京ヲ催サ

ル是秀吉小田原発向ニ定ルユエ 台徳公ヲ質子ト

シ御在京アラシメン為ナリ、

〔事例2〕は、天正十七年十二月、小田原の役直前

に行われた秀吉・家康の会談に関する叙述である。こ

こでの課題は、この会談Ⅱ「相議」がいつ行われ、そ

の内容が如何なるものであったのか、そして「台徳

公」秀忠が如何なる理由によつて上洛したのか、であ

る。

まず、この会談Ⅱ「相議」がいつ行われたのかにつ

いて、「事例1」で挙げた布告条と同日付で、以下の書状が秀吉から家康に発給されたと思われる。

「豊臣秀吉書状案」^⑦

(端裏書)

「駿河大納言(徳川家康)へ御書留」

態差遣使者候、北條儀、可致出仕由御請申、沼田城請取之、一札之面をハ不相立、信州真田(昌幸)持内なくなるミノ城乗取之由、津田隼人正(信勝)・富田左近(知信)かたへ、従其方之書状ニ相見候、然者、北條表裏者之儀候間、来春早々出馬、成敗之儀、可申付候、早四国・中国・西国、其外国々へ陣触申付候、其表境目之儀、又ハ人数可出之行等儀、可令談合候條、二三日之逗留ニ、馬十騎計にて、急々可被相越候、(略)

(天正十七年)

十一月廿四日

駿河大納言とのへ

猶以、越後宰相(上杉景勝)も四五日中ニ上洛之由候、幸候間、関東へ行之儀、可令直談候條、

早々上洛待入候、雖不及申候、駿申信堺目等、慥之留守居被申付可然候也、

右記書状案には、北条が「可致出仕由御請申、沼田城請取之」の約束に反して名胡桃を奪ったことが記されている。北条「成敗」につき、秀吉は軍勢派遣などに関して談合したいと家康の上洛を促している。これをうけて、家康は上洛のため十二月二日に岡崎を出立している。^⑧『家忠日記』天正十七年十二月十三日条によれば、

酒井宮内(家次)より京よりの御ふれ相州御陣之事申来候、関白様ハ明三月朔日、尾州大府様ハ二月五日、家康様ハ正月廿八日御出馬之由候、

とあり、正式に小田原の役の日程と豊臣への軍事的協力が決定されたことがわかる。したがって秀吉・家康の会談は、『家忠日記』の記主・松平家忠のいる徳川領内に、天正十七年十二月十三日には伝達されていたことがわかる。「相議」は、おそらく十日前後に行われたと想定される。

次に会談で話し合われた内容であるが、『武徳編年集成』では①「来春征伐スベキ旨」と、②「征伐」に当たって「台徳公ヲ質子トシ御在京アラシメン為」に「台徳公輔佐ノ族へ尊翰ヲ賜ハリ彼上京ヲ催サル」ことがその内容であつたと思われる。

①については右記書状案と右記『家忠日記』の記述から確定できるが、②については右記史料には記述されていない。これについて『武徳大成記⁹』の記事に、

(天正十七年十二月九日) 台徳院(秀忠)殿、十歳ニ成せ給フ、此冬秀吉へ謁見ノタメ、御上洛ニ定リケレドモ、秀吉ヨリ、侍臣ノモトへ書ヲ賜テ、幼少ニシテ、遠路ナリガタカルベシトテ、止メラレケル、十二日、神君駿府へ御帰リ、西尾ノ城ヨリ御書ヲ遣サレ、井伊直政酒井忠世青山忠成ニ、台徳院殿御上洛ノ事ヲ催促シ給フ、

とあり、『武徳編年集成』とほぼ同内容の文言が確認できる。『武徳大成記』は、林鳳岡・木下順庵らの編で、貞享三年(一六八六)の成立とされる¹⁰。このように編纂史料では、秀忠の上洛問題がこの会談での議題

にのぼっていたことは確認できるが、これまでは同時代史料では確認できるものがなかった。

「九月十七日付家康書状」

追而申候、長丸(徳川秀忠)上洛之儀、供者知行方をも請取候之間、少相延て不苦之由、

上意之旨候之由承候て、少相延し申候、雖然やかて可差上申候、□(尚カ)御次も候ハ、

可然様被仰上可有候、以上、

江州知行方之儀付而、被成下御朱印候、則頂戴仕候、仍而江州知行方之儀、当年之事ハ御代官被仰付、以物成可被下之旨、得其意存候、路次廻知行之儀、被成御替之、可被下之由、誠被為入御念候而被仰下候段、忝次第難申尽候、此旨可然様被仰上可有候、恐々謹言、

九月十七日

家康(花押)

木下半介(吉隆)殿

長東大蔵大輔(正家)殿

最近発見された右記家康書状について、筆者は以前天正十七年に比定した。その根拠として、a「長丸」¹¹秀忠が天正十八年に初めて上洛すること、b「長丸上洛之儀」「少相延て不苦之由、上意之旨候之由承候て、少相延し申候」が『多聞院日記』¹²天正十七年九月一日条にみえる諸大名妻子上洛令に対応していると考えられること、を挙げた。

この年代比定に基づき、右記家康書状にみえる「長丸上洛之儀」についての分析をしたい。右記家康書状追而書にみえるように、家康の世継である「長丸」はこの時点で上洛していない。

右記家康書状から明らかにするのは、「長丸上洛之儀」について、家康が知行をも請取っていることを理由に挙げ、「少相延て不苦之由」との秀吉の「上意」をうけて「少相延し申候」としていることである。前述したように右記家康書状は、豊臣政権の諸大名妻子上洛令に対応していると考えられることから、

① 豊臣の妻子上洛令が天正十七年九月一日に発せられ、その後ごろに徳川へも上洛令が伝わり、

② それに対し、家康は「長丸上洛之儀」を「供者知行方をも請取候」を理由として猶予してほしいと豊臣へ返答し、

③ 豊臣はそれに対し、「少相延て不苦之由」との（秀吉の）「上意」を徳川へ伝え、

④ 家康はその「上意」を承つて「長丸」の上洛を「少相延し申候」と豊臣に伝える。

というやり取りが豊臣と徳川の間にあつたと想定される。

右記家康書状発給の九月十七日からこの十二月上旬までは、家康の上洛は確認されず、また秀忠の上洛を促すような史料は確認できない。十二月十六日には家康が帰国し、その半月後には秀忠が上洛していることから、彼の上洛日程は、小田原の役の日程と豊臣への軍事的協力のことについて話し合われたこの会談の際に決定したとするのが妥当であると考えられる。¹⁴

また、これに関連して「九月十七日付家康書状」

①・②・④からは「長丸」¹¹秀忠の「上洛之儀」にあつて、徳川側に主導権のあつたことがわかり、③か

らは徳川側の主張を受け入れねばならない豊臣政権像が浮かびあがる。『武徳編年集成』では、「神君」が

「台徳公（秀忠）輔佐ノ族へ尊翰ヲ賜ハリ彼上京ヲ催サル」として、家康自身が秀忠の上洛を望んでいたことを記すのは注目される。前出の『武徳大成記』にも

「神君」が「台徳院殿御上洛ノ事ヲ催促シ給フ」とあり、秀忠上洛にあたっての家康の主体性を示している。

秀吉ではなく家康の意思によつての秀忠上洛が記述されるこれら編纂史料は、「九月十七日付家康書状」の「雖然やかて可差上申候」をうけていると考えられ、「長丸」の上洛に関して、家康の意思が尊重されていることがわかる。

すなわち、秀忠上洛にあつての徳川側の主導権については、同時代史料である「九月十七日付家康書状」と編纂史料である『武徳編年集成』『武徳大成記』とが相互に補完しあい、その信頼性を高めているといえる。

次に「台徳公」秀忠の上洛理由に関する問題を考えたい。『武徳編年集成』によれば、彼の上洛理由を

「秀吉小田原発向ニ定ルユエ 台徳公ヲ質子トシ御在京アラシメン為」とする。『三河後風土記』¹⁵ 巻第二十四には、

長丸君御上洛付関白出陣の事

長丸君（台徳公の御事也）未だ関白御対面なければ、小田原進発以前に御上洛あるべしとて、此正月三日駿府を出て給ふ、従ふ輩は井伊直政、酒井忠世、内藤正成、青山忠成也、同十三日御入洛あれば関白悦び給ひ、御迎として長束大蔵大輔を参らせらる、

とある。『三河後風土記』は、正保年間（一六四四〜四八）成立の編纂物である。¹⁶「小田原進発」とは小田原の役のことであるから、右記史料は天正十八年のものである。『三河後風土記』では、秀忠が未だに「関白」秀吉と対面したことがないので、小田原の役開戦前に上洛し対面したようである。¹⁷

一方で、同時代史料である『家忠日記』天正十八年正月七日条には、

若君（徳川秀忠）様御上洛候、今度之御上洛ハ、

関白様尾州信雄御むすめ子御養子被成、若君様と御祝言被仰合候、

とある。これによれば、「若君様御上洛候」とあり、その理由を「関白様尾州信雄御むすめ子御養子被成、若君様と御祝言被仰合候」として、秀忠と秀吉の養子となった織田信雄の娘との祝言のための上洛であるとしている。

また『多聞院日記』天正十八年正月二十八日条には、御本所御チャセン（織田信雄）ノ息女小姫君ト云、当年六才、関白殿（秀吉）ノ養子ニテ二三才之時ヨリ御育也、今度去廿一日歟、家康ノ世繼ノ子御長（秀忠）殿ト云十三才、コレト於受（聚）樂祝言在之、関東於存分、ケワキ料二三ヶ国可被遣之由也云々、事々敷祝言ノ様也ト、松林院ノ得業被語了、

とある。秀忠が実際に上洛し、「小姫君」との祝言が聚楽第において行われたことが記されている。これらの日記類には、秀忠の上洛を人質としての上洛ではなく、祝言を理由としての上洛であったとしている。ま

た彼が当時、世間から家康の「世繼」と解されており、「関東」すなわちこれから攻撃予定の北条氏の所領が関白秀吉の「存分」となれば、彼にその「三ヶ国」を遣わすという噂になっている。秀忠の上洛が、小田原の役を前提としていたことがわかる。

だが、一般に秀忠の室は浅井長政の三女であるといわれ、この信雄の息女で秀吉の養女となっていた「小姫君」と秀忠との祝言が実際に行われたかどうかは不明である。¹⁸しかしながら、天正十八年正月に秀忠が実際に上洛したのは多くの史料により確認でき、¹⁹彼の上洛が天正十七年九月の諸大名妻子上洛令に対応していることから、三ヶ月程度の猶予期間があったものの、実質的には徳川から豊臣政権への人質であるのは間違いないだろう。

したがって、ここでは秀忠の上洛理由を、行われたこと自体が確認できない祝言を理由としてのそれとみる日記類よりも、「秀吉小田原発向二定ルユエ 台徳公ヲ質子トシ御在京アラシメン為」とする『武徳編年集成』の叙述に信頼性があるともみるべきであろう。

三、「事例3」『武徳編年集成』天正十八年正月条

○二十五日 台徳公（秀忠）駿府に還入シ玉フ時

ニ 神君曰秀吉今度長丸ヲ留メサル事ハ東海道吾領内ノ城々ヲ借テ旧臣ヲ籠置小田原へ進発セント欲スナラン

〔事例3〕は、秀忠が上洛直後、帰国するという叙述である。これによれば、秀忠が駿府に戻った際に、

秀吉が今回「長丸」〓秀忠を自身の許に留め置かないのは「東海道吾領内」〓徳川領内の「城々」を（秀吉が）借り受けて（秀吉の）「旧臣」を置き、その上で小田原攻めを行うことを望んでいるとする。秀忠の帰国と豊臣軍の在番が東海道の諸城に置かれることは連動していると読み取れる。実際に東海道の諸城に吉川広家らが在番として置かれた事例は、同時代史料によって確認できる。

A、「小早川家文書」四四八号²⁰

北条儀、頃可致出仕旨、及御請一札之面、不相立、

結句、信州之内一城奪取之、其外於東国無道表裏、

無是非次第候、因茲、対北条如此被仰遣候、則写

加朱印為見之候、右之通被 仰出上者、来春被出

御馬、可加誅戮候、先勢從正月打立候、其方事、

尾州清須城請取、人数二千にて自身可在番候、同

国飯屋須賀城へ人数五百可被入置候、其用意可被

申付候間、為越年上洛無用ニ候、二月中旬必京着

肝要候、猶浅野弾正少弼（長吉）・黒田勘解由

（孝高）可申候也、

（天正十七年）

極月四日〇（秀吉朱印）

羽柴筑前侍從（小早川隆景）とのへ

B、「吉川家文書」一一三号²¹

北条儀為誅伐、来春至于関東被成御進発条、其方

事人数五百召連、二月中旬有上洛、尾州星崎城請

取、自身可被在番候、委曲輝元隆景江相達候、猶

浅野弾正少弼（長吉）・黒田勘解由（孝高）可申

候也、

（天正十七年）

極月四日○(秀吉朱印)

吉川侍従(広家)とのへ

四月二日○(秀吉朱印)

羽柴新庄侍従(吉川広家)とのへ

A・B史料は、何れも天正十七年十二月四日のものである。Aでは、秀吉から小早川隆景へ「尾州清須城請取、人数二千にて自身可在番候、同国飯屋須賀城へ人数五百可被入置候」とあり、在番の置かれたことが記される。Bでは、秀吉から吉川広家へ「二月中旬有上洛」以後に「尾州星崎城」の請取と在番を命じている。ただ何れも「尾州」のことであり、当時尾張は織田信雄領である。

では、徳川領には豊臣方の「在番」が置かれたのだろうか。

C、「吉川家文書」一一七号

山中城賁崩、伊豆国平均被仰付、小田原面江御先手一里五十町之間二陣取候、然者御跡在城番事、次第送二可入置候間、其地小早川かたへ相渡候間、岡崎之城請取、番等無由断可被申付候也、

(天正十八年)

これによれば、天正十八年四月二日、秀吉はこの時「吉川家文書」一一三号にみえる「尾州星崎城」の「在番」を吉川広家に命じていたが、これを小早川へ渡し、今回広家には替わりに三河岡崎城の在番を命じていることがわかる。

D、「小早川家文書」三七一号

此御物被成添奉行、被差上候間、以次人夫拾五人、可京着候、猶木下半介可申候也、

(天正十八年)

六月十五日○(秀吉朱印)

星崎 清須

羽柴筑前侍従(小早川隆景)とのへ

岡崎

羽柴新城侍従(吉川広家)とのへ

これを裏付けるようにD史料でも、星崎城に小早川

が、岡崎城に吉川が在城していることがわかる。⁽²²⁾

したがって「事例3」は、『武徳編年集成』にみえるように豊臣方「在番」が徳川領内に置かれたことは確実である。ただ『武徳編年集成』では、正月二十五日には「在番」が置かれたように叙述されるが、実際に豊臣方の「在番」が徳川領内に置かれた事実を同時代史料によつて確認できるのは、天正十八年四月二日以降であつた。

おわりに

最後に、今回明らかになつたことをまとめたい。

- ①「事例1」真田昌幸の所領分割問題に関する叙述について、『武徳編年集成』にみえる「真田安房守昌幸が上州ノ内所領三分二并ニ沼田城共ニ北条へ遣ハシ其代地ハ 徳川家ヨリ真田ニ授ラルベシ」は、『豊臣秀吉より北条氏直に遣れる宣戦布告状』の叙述内容とよく似通つており、事実関係はともかく、書誌学的にみればこれを参考に記述された可能性が
- ②「事例2」小田原の役直前に行われた秀吉・家康の会谈に関する叙述について、秀吉・家康の会谈は、『家忠日記』の記主・松平家忠のいる徳川領内に、天正十七年十二月十三日には伝達されていたことがわかり、『武徳編年集成』にみえる「相議」は、おそらく十日前後に行われたと想定される。また秀忠上洛にあつたつての徳川側の主導権については、同時代史料である新発見の「九月十七日付家康書状」と編纂史料である『武徳編年集成』『武徳大成記』とが相互に補完しあい、その信頼性を高めているといえる。さらに秀忠の上洛理由を、行われたこと自体が確認できない祝言を理由としてのそれとみる日記類よりも、「秀吉小田原発向ニ定ルユエ 台徳公ヲ質トシ御在京アラシメン為」とする『武徳編年集成』の叙述に信頼性があるともみるべきであろう。
- ③「事例3」秀忠が上洛直後に帰国するという叙述について、『武徳編年集成』にみえるように豊臣方の「在番」が徳川領内に置かれたことは確実である。

ただ『武徳編年集成』では、正月二十五日には「在番」が置かれたように叙述されるが、実際に豊臣方の「在番」が徳川領内に置かれた事実を同時代史料によつて確認できるのは、天正十八年四月二日以降であつた。

近年『武徳編年集成』のような江戸期の編纂史料は、近世史料論として編纂されたるころの事情や編纂者らの意図が加えられた意味合いを問うものが多く、またそのような視角から、その叙述は史実とはやや乖離したものと捉えられがちである。もちろん編纂者らがある意図のもとに史実を改編しようとしたことはあつたであらうが、その反面彼らは何らかの史料的根拠をもとに叙述したのは間違いなく、彼らが全く史実と異なつた叙述をしていたとはいえないだろう。

『武徳編年集成』の叙述について、「九月十七日付家康書状」など、小和田氏が考察した当時には無かつた同時代史料を利用することにより、小和田氏が考察しきれなかつた部分のいくつかを、新たに事実確認できたと考える。

しかしながら、今回の考察はあくまで取り掛かりであり、事実確認できた箇所はわずかに過ぎない。今後、機会が与えられるのであれば、また分析していきたいと考える。

註

- (1) 朝尾直弘、宇野俊一、田中琢編『角川日本史辞典』(角川書店、一九九六年)「武徳編年集成」項。
- (2) 小和田哲男「『武徳編年集成』の史的考察」(小和田哲男編『戦国大名論集12 徳川氏の研究』吉川弘文館、一九八三年。初出は一九七六年)。
- (3) 個別具体名は挙げないが、拙稿A「九月十七日付家康書状の紹介と在京賄料」(『ヒストリア』一九七、二〇〇五年)・拙稿B「豊臣政権の対北条政策と「長丸」の上洛」(『織豊期研究』七、二〇〇五年)において、事実確認を行う際に「『武徳編年集成』等、編纂史料の用い方に問題があるのではないかとの指摘を幾人かより頂いた。その指摘をうけて本稿では、一部ではあるが『武徳編年集成』の事実確認を丁寧に行いたい。」
- (4) 『戦国遺文』(東京堂出版、一九八九年)後北条氏編、三四七四。
- (5) 中村孝也「新訂徳川家康文書の研究」(日本学術振興会、一九八〇年)上巻、750ページ。
- (6) 『武徳編年集成』には「江雪大坂二赴キ」とあつた

が、いずれにせよ秀吉の許に赴いたことに違いはない。

- (7) 『神奈川県史』(神奈川県企画調査部県史編集室編、一九七〇年) 資料編3 古代・中世(3下)、九五〇〇。

- (8) 『家忠日記』天正十七年十二月二日条。

- (9) 『武徳大成記』(汲古書院、一九八九年)。

- (10) 前掲『角川日本史辞典』「武徳大成記」項。

- (11) 『多聞院日記』(『増補統史料大成』第四十一巻、臨川書店、一九七八年)。

- (12) 「九月十七日付家康書状」に関する調査・年代比定については、拙稿Aを参照されたい。

- (13) 拙稿B【表C】参照。

- (14) 拙稿B。

- (15) 『三河後風土記』(『通俗日本全史』第十巻、早稲田大学出版部、一九二二年)。

- (16) 『国史大辞典』(国史大辞典編集委員会編、一九七九年)「三河後風土記」項。

- (17) 「三河後風土記」と対応する『武徳編年集成』の同日条を以下に掲げる。

『武徳編年集成』天正十八年正月条

○三日 台徳公御年十二歳長丸君也駿府城ヲ御発駕

アリ井伊兵部大輔直政三十歳酒井右兵衛大夫忠世内藤修理亮正成青山常陸介忠成等扈從ス○十三日御京着秀吉ノ使長束大蔵少輔正家参向御上京ノ謝詞ヲ述ル(略)○十五日 台徳公聚楽城ニ到リ玉ヲ酒井忠世御刀ヲ役シ内藤正成青山忠成等御側ニ侍ル(略)

- (18) 故徳川義宣氏より、この際の祝言が実際に行われたかどうかについては検討を要するとのアドバイスを頂いた。これに関して拙稿Bでは、祝言が行われたかどうかという事実よりも、祝言が「長丸」の上洛を促すための豊臣側の表向きの口実に用いられたことを重要視したい、とした。

- (19) 拙稿B【表A】参照。

- (20) 『大日本古文書』家わけ十一ノ一(東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九二七年)。

- (21) 『大日本古文書』家わけ九ノ一(東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九二五年)。

- (22) 小田原の役に際しての豊臣政権の「在番」については、小林清治『秀吉権力の形成』(東京大学出版会、一九九四年)第三章一四が詳しい。